

第四十節の秘められた歴史——第十三番

第十三番

Jeff Pippenger

2026-05-28

十四万四千人の主要な象徴として、ペテロは2026年にパニウムに立ち、2020年7月18日の偽りの予測を正すために働いている。この点における彼の働きは、ジョサイア・リッチによる1840年8月11日の訂正、およびサミュエル・スノーによる1844年10月22日の特定の働きと一致している。リッチの訂正は第一天使の使命に力を与え、スノーのものは第二天使の使命に力を与えた。第一および第二天使の使命に対するこの力の付与は、第三天使の使命への力の付与を予型している。第一および第二の特質は、外的な禍いの使命と、十人の処女のたとえにおける真夜中の叫びという内的な使命との結合として、第三のうちに表されている。

預言の三重の適用においては、第一と第三、すなわち初めと終わりとは、互いに平行する特質を有することになる。近年、一人の兄弟が黙示録第九章の第一の災いに関わる幾つかの真理を見いだしたが、それらは、アルファとオメガの原則のもとに適用されるとき、黙示録第十一章の「地震」に対するもう一つの深遠な確証を示すものである。アメリカ合衆国における日曜休業令は「地震」であり、これは、ダニエル書において異教ローマの預言的構造を成した十の国々の一部であったフランスが打ち倒されたフランス革命において、最初に成就した。したがって、第十一章は、都の十分の一が倒れたと述べている。

そして、その時に大地震が起こり、都の十分の一が倒れた。この地震で七千人が死に、残った者たちは恐れに満たされ、天の神に栄光を帰した。黙示録 11:13

この節の直後に、第三の災いとしてのイスラム教が到来する。

第二の災いは過ぎ去った。見よ、第三の瀾いがすぐに来る。黙示録 11:14。

先駆者たちは、「第三のわざわい」は第二のわざわいに直ちに続くものと予期していた。しかし、「すみやかに」と訳されている語は、突然に、そして予期せぬかたちで、という意味であり、これはイスラムの奇襲攻撃の特徴である。第三のわざわいは、先駆者たちが推測したように1844年10月22日に到来するのではなかったが、ひとたび到来するならば、それは9/11においてそうであったように、「突然に、そして予期せぬかたちで」起こるのであり、それによって十四万四千人の印を押す働きの開始が示されるのであって、その働きは日曜法の地震の少し前に終わるのである。

日曜法における「地震」とは「地」の獣が揺り動かされることであり、9・11が到来したとき、シスター・ホワイトは、主が「地を激しく震わせる」ために立ち上がられたと示した。印の押印の初めと終わりにおいて、地の獣は揺り動かされるのであり、それゆえに「大地震」なのである。

「わたしはこのようなことは一度も言ったことがない。わたしは、そこに幾階にも重ねてそびえ立つ大建築を見ながら、こう言ったのである。『主が立ち上がって地を激しく揺り動かされる時、なんと恐るべき光景が展開することであろうか。そのとき、黙示録 18:1-3 の言葉が成就するのである。』」『Review and Herald』1906年7月5日。

主は、その経綸的働きに変化が生じるときに「立ち上がられる」。それは、ステパノが石打ちにされた時や、死者の審判が開始された1844年10月22日の場合がそうであった。生者の審判が9/11に始まった時、主は再び立ち上がり、その時、地の獣を揺り動かされた。ちょうど、十四万四千人の印が終わる時に、なおバビロンにいる者たちから成る御自身の他の群れへと、その経綸的働きを御自身の教会から移される際に、そうされるように。

ダニエル兄弟が見いだしたのは、第一の禍の特徴であり、それは、歴史、および第一の禍を成就した歴史についての先駆者たちの理解と一致して、第十一章の「大地震」の証言と合致するものである。

すると、第五の御使いがラッパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。そして彼に、底知れぬ所の穴の鍵が与えられた。彼がその底知れぬ所の穴を開くと、大きな炉の煙のような煙がその穴から立ち上った。そして、その穴の煙のために、太陽も空気も暗くなった。その煙の中から、いなごが地上に出て来た。そして彼らには、地のさそりが持つような力が与えられた。彼らは、地の草も、どんな青草も、どんな木も害してはならず、ただ、その額に神の印を持たない人々だけを害するように命じられた。黙示録 9:1-4。

先駆者たちは、これらの聖句を、570年に生まれ、606年に諸部族を統一し、610年に最初の啓示を受け、622年にメディナへ移住し、624年に戦いを開始し、632年に死去したムハンマドを世に出した歴史に、正しく適用した。「底知れぬ所」は、預言的にはサタンの新たな現れを表すが、ムハンマドはアラビアにおいて始まったのであり、アラビアは広大な砂漠のゆえに、底知れぬ所としても知られている。

ムハンマドは、606年に、カアバの「黒い石」の礎石を元に戻すことを誰に許すべきかについて板挟みになっていた諸部族の間の争いを解決したとき、預言的な王となった、あるいは彼に与えられていた呼称によれば、「信頼できる者」となった。カアバは立方体の形をした建物であり（したがって「カアバ」という名称は、アラビア語で「立方体」を意味する）、サウジアラビアのメッカの大モスクの中央に位置している。その高さは約43フィート、幅11フィート、長さ10フィートで、花崗岩と大理石で造られ、黒い絹と木綿の布で覆われている。カアバはムハンマド以前から存在しており、イスラムの伝承によれば、もともとはアブラハムとその子イシュマエルによって、唯一の神（アッラー）を礼拝する家として建てられた。幾世紀にもわたり、それは偶像で満たされ、アラブ諸部族によって異教の聖所として用いられるようになった。

カアバは、イスラム世界の霊的中心である——それは、古く簡素な建造物であり、一神教、統一、そしてアブラハムの信仰とイスラムとの結びつきを象徴している。ムスリムはそれを文字どおりの意味で「神の家」とはみなさず、むしろ礼拝のために神によって定められた中心的焦点とみなしている。カアバが破壊され、その後再建された時期における

ムハンマドの行動において、彼の指導力は始まったのである。

激しい鉄砲水がカアバを損ない、クライシュ族はそれを再建した。黒石（Hajar al-Aswad）をその隅に戻して据える時が来ると、どの氏族がその栄誉を担うべきかをめぐって、さまざまな氏族が争った。彼らは、次にその場に入って来る者に決定を委ねることで合意した。そこへムハンマドが入って来て、彼はその争いを賢明に解決した。すなわち、彼は黒石を一枚の布の上に置き、各氏族から一人の代表にそれを共に持ち上げ、共に運ばせ、その後、自らそれを所定の場所に据えた。この出来事により、彼はメッカの人々の間で大いなる尊敬と、「Al-Amin（信頼される者）」という称号を得た。これは、多くの年表において強調される、預言者となる以前の主要な出来事の一つである。「黒石」は、イスラムの上に立つ預言的王であるムハンマドによって据えられた要石であった。黒い要石は、キリスト（真の要石）の明白な偽造物であり、また、偶像の導入が長年にわたって進んだ後のカアバの家の腐敗も、ムハンマドによって解決された。

クライシュ族がフダイビーヤの和約を破った後、ムハンマドはおよそ一万人のムスリムから成る軍勢を率いてメッカへ進軍した。都市はごくわずかな戦闘ののちに降伏した。続いてムハンマドはカアバに入り、その内部にあった三百六十の偶像を打ち壊し、その聖所を唯一の神（アッラー）への礼拝のために改めて奉献した。かくして、イスラームの王ムハンマドは礎石を据え、神殿を偶像礼拝から清めた。

黙示録には、底知れぬ所から出て来る三つの勢力があり、その三つはそれぞれ偽キリストを表している。竜であるサタンは、いと高き方のようになり、その御座とその教会に着こうと求める。

ああ、明けの明星の子、ルシファーよ、あなたはなんと天から落ちたことか。国々を弱らせた者よ、あなたはなんと地に切り倒されたことか。あなたは心のうちに言った、『私は天に上ろう。私の王座を神の星々の上に高く置こう。また、私は北の果てなる会合の山に座しよう。私は雲の頂を越えて上ろう。私はいと高き者ようになろう』と。だが、あなたは陰府に、穴の底にまで落とされる。イザヤ書 14:12-15。

無神論という竜は『黙示録』第十一章において底知れぬ穴から出て来たのであり、またカトリック主義という獣は、その致命的な傷がいやされるとき、底知れぬ穴から上って来る。

あなたが見た獣は、かつてはいたが、今はおらず、やがて底なしの淵から上って来て、滅びに至る。そして、地に住む者たち、すなわち世の初めからいのちの書にその名が記されていない者たちは、かつてはいたが、今はおらず、しかもなおいるその獣を見て驚嘆する。黙示録 17:8。

カトリック主義の獣は、三重の連合が確立される日曜法の時に、地の王座へと昇る。竜のように、カトリック主義は自らを神であると主張するのであり、これはパウロがまことに適切に指摘したとおりである。

だれにも、どのような方法によっても、だまされてはなりません。まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、その日は来ないからです。彼は、神と呼ばれるすべてのもの、また礼拝されるすべてのものに逆らい、自らをその上に高

く上げ、その結果、自分こそ神であることを示して、神の宮に神として座するのです。
Ⅱテサロニケ 2:3, 4.

竜と同様に、カトリック主義の獣は反キリストであり、両者とも自らを神と称し、また両者の最終的な滅びはその聖書的証言と結び付けられている。すなわち、竜は地獄に投げ落とされ、獣は滅びの子である。滅びとは最終的な破壊を意味する。

「天において彼が始めた反逆を遂行しようとする反キリストの決意は、不従順の子らのうちに働き続けるであろう。」『証言集』第9巻、230頁。

「ローマ教皇を通して、闇の君が追放される以前に天の宮廷で行われていたのと同じ働きが、ここ地上においても遂行されてきた。サタンは天において神の律法を改めようとし、自らの修正案を付け加えようとした。彼は自分自身の判断を創造主の判断の上に高め、自分の意志をエホバの御意志の上に置き、このようにして事実上、神には誤りがあり得ると宣言したのである。教皇もまた同じ道をたどり、自らに不可謬性を主張して、神の律法を自分自身の考えに合うように調整しようとし、天地の主の制定と命令のうちに自分が見いだすと思う誤りを正すことができると考えている。彼は事実上、世に向かってこう言っているのである。わたしはあなたがたに、エホバの律法よりも優れた律法を与えよう。これは天の神に対する何という侮辱であろうか！」『Signs of the Times』1894年11月19日。

七世紀の歴史においてムハンマドによって表されたイスラム教もまた、ムハンマドに与えられた鍵が回されたとき、底知れぬ所から出て来た。穴が開かれたとき、太陽と空気とを暗くする「煙」が立ち上った。先駆者たちは、その穴を開いた「鍵」がニネベの戦いであったことを正しく見極めた。

黙示録第九章の最初の三節を、預言の三重適用という文脈における先駆者たちの理解から考察するとき、第一の災いを表すそれらの節の預言的特質が、大地震において「すみやかに」到来する第三の災いの預言的特質を予型的に示していることが分かる。日曜法は、ニネベの戦いによって表象されている。

ペテロには、ナッシュビルの火の玉に関する誤った予言を訂正する責任があり、彼はまた、ナッシュビルに降る火の玉についてのエレン・ホワイトの警告を正しく適用することが、「ほとんど完全に偶像礼拝に身を委ねた何千もの都市の滅亡」の始まりを示すものであることを認めている。

ナッシュビルの火の玉は、諸都市に対する破壊の時期の始まりを画するものであり、また、短い真夜中の叫びのメッセージの宣布の始まりをも画するものである。そのメッセージは、イスラムによる不意の攻撃をもって始まり、その期間は、大地震におけるイスラムによる不意の攻撃をもって終わる。真夜中の叫びの宣布の期間は、9/11におけるイスラムの不意の攻撃をもって始まった十四万四千人の印を押される時の終結を画するものである。

こうして十四万四千人の封印は、バラムとろばの線に一致して始まった。そこには日曜法に至って頂点に達する三度の打撃があるが、その第二の予期せぬ攻撃には、古代の栄光の地に対する2023年10月7日の出来事、そしてさらにナッシュビルの火の玉の時が含まれ

ている。すべての線は一致しており、ペテロは、散らされた宝石を集めて小箱の中に投げ入れる土埃を払う人として表象されているこれらの真理の封が解かれることが、ユダ族の獅子の働きであることを理解している。

ユダの獅子は、ピーターのナッシュビルにおける訂正されたメッセージを、ダニエル書十一章四十節の秘された歴史に表されている十四万四千人の封印の最終期間に生起するものとして特定しており、さらに具体的には、同章十一節から十五節に表されているその秘された歴史の部分において生起するものとしている。それらの節においては、ラフィアの戦いとパニウムの戦いが、アクティウムの戦いによって表象される十六節の日曜法へと導く。パニウムの戦いが日曜法においてアクティウムの戦いと結び合わされると、ニネベの戦いもまた繰り返される。

イスラムの王であるムハンマドに与えられた「鍵」。その名は、単にイスラムの性格を示すだけでなく、ニネベの戦いによって与えられた滅びの場所をも示している。その王の名は、「ヘブル語ではアバドン」であり、「ギリシヤ語ではその名をアポルオンという」。ギリシヤ語とヘブル語は旧約聖書と新約聖書を強調しており、また、アバドンが「滅びの場所」を意味し、アポルオンが「滅ぼす者」を意味することを教えている。黙示録第九章十一節において、イスラムを治める王はムハンマドであるが、同時にそれは「底知れぬ所の使い」、すなわちサタンでもある。ちょうど教皇が地上におけるサタンの右腕として反キリストであるように、ムハンマドもまた、底知れぬ所の使いであるサタンによって直接支配されている。

日曜休業令において、三重の同盟が世界に強制され、かくして暗黒時代の終結を画した一七九八年に教皇制に与えられた致命的な傷は癒やされる。致命的な傷が癒やされる時、暗黒時代の第二の期間が到来し、そして日曜休業令であるその大地震において、イスラムが鍵を回し、炉から出る煙のような煙が、暗やみが再来するにつれて太陽と星々を覆い隠す。ニネベの戦いは日曜休業令において繰り返される。なぜなら、それは第二の暗黒の期間をもたらす鍵だからである。そこでは、国家的背教に続いて国家的破滅が起こる。そこでは、「活動的専制」が完全に支配権を振るう。なぜなら、ニネベの戦いにおいて太陽と星々を暗くするイスラムの煙は、燃える炉のようだからである。「燃える炉」は、神のアブラハムとの契約の一要素であった。

日が沈み、暗くなったとき、見よ、煙を吐く炉と燃えるたいまつが、それらの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。創世記 15:17。

アブラムの契約の供え物の間を通り過ぎた煙を出す炉は、第十三節のくだりに示されている、エジプトにおける奴隷の状態を表していた。

主はアブラムに言われた。「あなたは、このことを確かに知っていなければならない。あなたの子孫は自分たちのものではない地で寄留者となり、その人々に仕え、彼らは四百年の間、これを苦しめるであろう。」創世記 15:13。

「燃える炉」は、ダニエル書第三章におけるネブカドネザルの炉のように、束縛と奴隷状態を表しており、それはシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの置かれていた状態であった。

「しかし、その定められた軌道の広大な巡りを行く星々のように、神の御目的には拙速も遅延もない。大いなる暗闇と煙を吐く炉の象徴を通して、神はアブラハムに、イスラエルがエジプトで奴隷の身となることを示し、また彼らの寄留の時間が四百年であることを宣言された。『その後、彼らは多くの財産を携えて出て来るであろう』と主は言われた。創世記 15:14。」『各時代の希望』33頁。

しかし主はあなたがたを取り、鉄の炉の中から、すなわちエジプトから導き出し、今日のように、ご自分のための嗣業の民とされた。申命記 4:20。

ニネベの戦いの鍵が回されるときに太陽と月を暗くする煙は、日曜法の時に本格的に始まる迫害を示している。こうして暗黒時代の迫害が再現されるのである。先駆者たちは、ニネベの戦いが、627年に第一の災いとしてイスラム教を預言の歴史の中にもたらした「鍵」であることを正しく見極めていた。その戦いはローマとペルシアの間で行われ、ローマの勝利を意味していたが、それは、いわゆるピュロスの勝利であった。すなわち、実際には勝者に害をもたらず勝利である。この語句は、エペイロスの王ピュロスの勝利に由来する。彼はローマ人に対する二度の戦い（紀元前280年のヘラクレス、紀元前279年のアスクルム）の後、ローマ軍を打ち破ったが、自軍の兵の非常に大きな部分を失った。伝説によれば、そのとき彼はこう言ったという。「このような勝利がもう一度あれば、われわれは滅びる。」

ニネベの戦いはローマにとって戦略的勝利であったが、それが終わった時、ローマもペルシアも、その後に押し寄せるイスラムの猛攻に有効に抵抗する力をもはや持っていなかった。ニネベの戦いの現代的成就において、ペルシアは合衆国であり、ローマは教皇制である。二本の角を持つ勢力としてのメド・ペルシアは、合衆国の二本の角を持つ勢力を表している。日曜法の時において、合衆国は単に一本の角である。というのは、日曜法に至るまでに獣の像が形成されており、その形成とは二本の角の両方を一つに結合することから成っているからである。ダニエル書第八章には、メド・ペルシア帝国を表す二本の角があり、そしてペルシアの角は後になって生じた。

それから、私が目を上げて見ると、見よ、一頭の雄羊が川の前に立っていた。それには二本の角があり、その二本の角は高かったが、一方は他方よりも高く、しかも高いほうは後から生えた。ダニエル 8:3。

アメリカ合衆国の二本の角、すなわち共和主義とプロテスタント主義とは、教会と国家が結合して獣の像を形成するとき、一つとなる。その形成は、日曜法において獣の刻印が強制されるとき、完全に成就する。これにより、アメリカ合衆国は日曜法の時点において、まさしくペルシャであることが示される。ペルシャはニネベの戦いにおいてローマに敗れた。ローマがいかにしてペルシャを打ち破ったかは、ローマ皇帝ヘラクレイオスの軍略のゆえに、歴史的に重要な意義を有している。

簡潔に言えば、ヘラクレイオスは、正面から前進する攻撃ではなく、奇襲攻撃を成し遂げたのである。奇襲を成功させるための彼の努力は、歴史にも記されている。その奇襲には、当時としては異例であった冬季に攻撃を決断したことも含まれていたが、それにとどまらなかった。ヘラクレイオスは、627年9月中旬、北方（アルメニア高地）から侵攻を開始した。ペルシアの首都クテシフォンへ向けて南へ直接進むと予想された経路を取る代

わりに、彼は大きく弧を描き、国境地帯（おおよそ現代のトルコ・イラン国境）に沿って南東へ移動した。その後、627年12月1日に大ザブ川を渡り、南および西へ向きを転じた。これにより、彼の軍は古代ニネヴェの遺跡に近いニネヴェ高原（ティグリス川東岸）に位置することとなった。この移動は、ペルシア軍との相対関係において南から北への進軍であり、ペルシア側の予期とは正反対であった。彼らは、ヘラクレイオスがそのままクテシフォンへ向けて南進を続けるものと予想していたのである。これによって、ペルシア軍の指揮官ラフザードは不意を突かれ、ヘラクレイオスを不利な地形へ追撃せざるを得なくなった。それによってローマ軍は、ニネヴェ近郊の平原において戦場を選ぶことができた。この機動によって、ローマ軍がペルシア軍に挟み撃ちにされることは防がれ、必要であれば退路も確保された。これに加えて、戦闘当日の霧、および実際の戦闘中に用いられた偽装退却の戦術があり、奇襲には幾重もの層があった。この大胆な冬季侵攻と、ペルシア領深くへの迂回側面進軍は、ヘラクレイオスの最大の軍事的偉業の一つと見なされている。それはペルシアの自信を打ち砕く一助となり、この長期戦における最終的なローマの勝利に大きく寄与した。

「夜明けから第十一時まで激しく戦われたニネベの戦いにおいて、破損または引き裂かれたであろうものを別として、二十八の軍旗がペルシア軍から奪われた。彼らの軍勢の大部分は切り刻まれて滅ぼされ、勝利者たる（ローマ軍）は自軍の損害を秘して、その夜を戦場で過ごした。アッシリアの諸都市と宮殿は、この時初めてローマ人に対して開かれた。」

「ローマ皇帝は、自ら成し遂げた征服によって強められることはなかった。そして同時に、また同じ手段によって、アラビアから来たサラセン人の大群のために道が備えられた。彼らは、同じ地方から出るいなごのように、その進路において暗黒にして惑わしに満ちたマホメット教の信条を広めつつ、たちまちペルシア帝国とローマ帝国の双方を覆い尽くした。」

この事実について、これ以上に完全な例証は、前掲の抜粋の出典であるギボンのその章の結びの言葉によって示されている。『ヘラクレイオスの旗印の下に勝利の軍勢が編成されたとはいえ、その不自然な努力は、彼らの力を鍛えたというよりも、むしろ使い尽くしたものと思われる。皇帝がコンスタンティノープルまたはエルサレムにおいて勝利を収めていたその時、シリア辺境の一寒村がサラセン人によって略奪され、これを救援に進んだ若干の部隊は切り刻まれた—それは、もしそれが一大革命の前触れでなかったならば、ありふれた取るに足らぬ出来事にすぎなかったであろう。これらの略奪者はムハンマドの使徒たちであった。彼らの狂熱的勇猛は砂漠から現れ出た。そしてその治世の最後の八年間に、ヘラクレイオスは、かつてペルシア人から奪い返したまさにその属州を、アラブ人に奪われた。』

「『その住まいが天にあるのではない欺瞞と熱狂の霊』が、地上に解き放たれた。底知れぬ淵は、これを開くための鍵さえあれば足り、その鍵とはコスローの没落であった。彼はメッカの一介の無名の市民からの書簡を、軽蔑をもって引き裂いた。しかし、彼がその『栄光の炎』から、いかなる目も見通し得ない『暗黒の塔』へと沈み落ちたとき、コスローの名は突如としてムハンマドの名の前に忘却へと去ることになった。そして、三日月は、あたかもその星の没落を待って自らの昇る時を得るかのように見えた。コスローは、全面的敗北と帝国喪失ののち、西暦628年に殺害され、そして629

年は、『アラビアの征服』および『ローマ帝国に対するムハンマド教徒の最初の戦争』によって画されている。『第五の御使いがラッパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。そして、その者に底知れぬ淵の鍵が与えられた。彼はその底知れぬ淵を開いた。』彼は地に落ちたのである。ローマ帝国の力が尽き果て、東方の大王がその暗黒の塔に死して横たわるとき、シリア国境の一無名の町の略奪が、『一大革命の序曲』となった。『その略奪者たちはムハンマドの使徒たちであり、その狂熱的な勇武は荒野から現れ出た。』ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』495-497頁。

ニネベの戦いは、日曜法において現代のローマが合衆国を征服することを表しているが、それはピュロスの勝利である。なぜなら、ローマに対する進行的な裁きが日曜法において始まるからである。

コスローエスはペルシア帝国の首領であった。したがって、日曜法における合衆国の没落を表象するペルシアは、聖書預言における第六の王国の没落の時に底知れぬ穴を開く鍵である。それは、ダニエル書十一章十六節、三十一節、四十一節の日曜法、ならびに黙示録十三章十一節を表している。

同じ聖句と歴史に関する先駆者スティーブン・ハスケルの注解に注目しなさい。

「アラブ人、すなわちサラセン人は、かつて地上において何らの影響力も行使したことがなかった。諸国民の歴史において、これら砂漠の自由人たちは、ほとんど顧みられることなく過ぎ去っていた。マホメット教は散在していた諸部族を結束させ、彼らを諸国民の征服者として送り出した。サラセン軍の急速な進展は、その大きな部分において、ローマ人と近代ペルシア帝国の首長クロスローとの間の争いに負うものであった。この争いは後者の没落をもたらした。近代ペルシアは、マホメットの勢力を抑制する防壁として立っていた。しかし、その勢力が倒れると、その防壁は取り除かれ、『底知れぬ穴』が開かれ、サラセン人は世界を氾濫させた。『底知れぬ穴が開かれると、太陽の顔を隠す煙が立ち上った。』この比喩はきわめて力強く、マホメット教が地の全面に広がるにつれて及ぼした暗化の影響を表している。」Stephen Haskell, The Story of the Seer of Patmos, 164, 165.

ローマの歴史におけるその障壁の壁とは、日曜法において取り除かれる教会と国家の分離の壁である。ニネベの戦いにおけるローマのペルシアに対するピュロスの勝利には、さらにもう一つの層がある。というのも、それ以前にもう一つのニネベの戦いがあり、それはアルファを表し、627年の戦いはオメガを表しているからである。その戦いは紀元前612年に起こり、両者の間にはおよそ千二百年の隔たりがある。その戦いにおいて、アッシリアは三重の同盟によって打ち破られ、これがアッシリア帝国の終焉を画した。

A・T・ジョーンズは、ニネベのアルファの戦いについて次のように述べている。

「アッシリア政府の政情は悪化の一途をたどり、その結果、紀元前612年には、再び同じ三国による大規模な反乱が起こったが、今回はナボポラッサル自身がこれを指導した。今度の反乱は完全な成功を収めた。すなわち、ニネベは瓦礫の山と化し、アッシリア帝国は三つの大区分に分割された——北東部および最北部をメディアが保持し、エラムとユーフラテスおよびチグリスの全平原と諸谷をバビロンが保持し、ユーフラ

テス川以西の全地域をエジプトが保持したのである。バビロンとメディアとのこの同盟の証印は、メディア王の娘がナボポラッサルの子ネブカドネザルに嫁いだことであった。ユダの王ヨシヤが彼と戦うために出て行き、メギドで殺されたとき、エジプトの王ファラオ・ネコが、アッシリアに対するこの同盟における自らの役割を果たすべく、ユーフラテス河畔のカルケミシュでアッシリアの王と戦うために上って行ったのであった。そして、この西方の全領域がエジプト王に属していた以上、征服によって獲得した彼の正当な主権を行使して、彼がヨシヤの子シャルムをユダの王位から退け、その代わりにエルヤキムをユダの王に任じ、その名をエホヤキムと改め、さらにその地に貢税を課したのである。」歴代誌第一 3:15;列王記第二 23:31-35. A. T. Jones, Review and Herald, March 15, 1898.

紀元前612年のニネベにおけるアルファの戦いにおいて、アッシリア帝国は終焉を迎えた。それは、聖書預言の第六の王国が日曜法において終わると同様である。その戦いの勝者は、バビロン、エジプト、メディアによる三重の同盟であった。その時代の戦争において、ヨシヤ王はメギドで死に、こうしてアルマゲドンを予型する。627年のニネベにおけるオメガの戦いにおいては、第三の災いのイスラム教が解き放たれるが、それは、ハスケルが、ペルシアの敗北によって保護の「障壁の壁」が取り除かれることとしてペルシアについて述べたように、憲法における保護の壁が取り除かれることによって予型されている。ヨシヤ王のメギドでの死は、ニネベの最初の戦いが終わりの日における第二の戦いであることを示している。627年における、鍵が回されて底なしの穴が開かれるときの、二つのニネベの戦いのうち最後の戦いは、終わりの日における最初の戦いである。なぜなら、最初のものが最後になるからである。アッシリアと三重の同盟との間の最初のニネベの戦いは、アルマゲドンへと導く。第二の暗黒時代の期間は、ニネベの戦いによって始まり、ニネベの戦いによって終わる。

黙示録第九章の第一の災いである第五のラツパに関する事実は、黙示録のいかなる箇所にも増して最も明白な歴史的証拠であると、先駆者たちは理解していた。ウライア・スミスはその事実を次のように述べている。

「第1節、『第五の御使いがラツパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。そしてその者に、底知れぬ穴の鍵が与えられた。』」

「このラツパについての解説として、われわれは再びキース氏の著作に拠ることにする。この著者は、次のように真実をもって述べている。『第五および第六のラツパ、すなわち第一および第二の災いを、サラセン人およびトルコ人に適用することに関してほど、黙示録の他のいかなる部分についても、解釈者たちの間にこれほど一様な一致が見られることはほとんどない。それはあまりにも明白であるため、ほとんど誤解されようがない。それぞれを指し示す一、二節ではなく、ヨハネの黙示録第九章全体が、等しい分量をもって、その両者の描写に充てられているのである。』ウライア・スミス『ダニエル書と黙示録』495頁。」

ペテロはナッシュヴィルの火の球のメッセージを訂正する責務を負ってパニウムにおり、そこで初めて、第一の災いの諸要素が、まさに到来しようとしている日曜法の諸要素と完全に一致していることが明らかにされる。ユダ族の獅子は、御自身がすでに定めておられた他の預言の系統と一致して、この理解を開封された。歴史家たちは、六二七年に口

ローマがペルシアに対して成し遂げた奇襲攻撃の重要性について証言するであろうが、その際、彼らは、攻撃の時まで身を隠しておくための策略として、冬季におけるヘラクレイオスのペルシアの周囲および背後への機動に注目した。

ホワイト姉妹は、ローマはただ「有利な立場」を待っているだけであり、やがて一撃を加えるであろうと、私たちに告げている。

「神の御言葉は、差し迫った危険について警告を与えてきた。これが顧みられないなら、プロテスタント世界は、ローマの真の目的が何であるかを、畏を逃れるにはもはや遅すぎる時になって初めて知るのである。彼女はひそかに勢力を増しつつある。彼女の教理は、立法府において、諸教会において、そして人々の心の中において、その影響を及ぼしている。彼女は、その秘密の奥所において、かつての迫害が再び繰り返されることになる、高く巨大な構造物を積み上げつつある。彼女は、時が来て打撃を加える際に自らの目的を遂げるため、ひそかに、また気づかれないまま、その勢力を強めている。彼女の望むものは、有利な足場だけであり、しかもそれはすでに彼女に与えられつつある。わたしたちはまもなく、ローマ的要素の目的が何であるかを見、またそれを身に受けるようになるであろう。だれでも神の御言葉を信じ、これに従う者は、それによって非難と迫害を招くのである。」『各時代の争闘』581頁。

皇帝ヘラクレイオスの場合と同様に、教皇制は、イザヤ書第二十三章の成就として、「ひそかに、思いがけなく」その目的に向かって進んできた。そこでは、ティルス淫婦が、聖書預言における第六の王国の歴史のために忘れ去られるのである。ヘラクレイオスの秘密裡の奇襲は、1798年から日曜法に至るまで、世界が教皇制を忘れることを表している。教えに教えを加えるごとく、第一の災いは第三にして最後の災いを表象する。第一の災いにおいては、イスラムの歴史および十四万四千人の印を受ける期間にも符合する宣告がなされる。

そして彼らは、地の草も、いかなる青いものも、いかなる木も害してはならず、ただ額に神の印を持たない人々だけを害すべきことを命じられた。また彼らには、その人々を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることが許された。その苦痛は、さそりが人を刺すときの苦痛のようであった。その日々には、人々は死を求めても見いだせず、死にたいと願っても、死は彼らから逃げ去るのである。黙示録 9:4-6。

近く到来する日曜休業令であるニネベの戦いにおいて鍵が回される前に、十四万四千人はすでに封印されている。日曜休業令の時に、ナッシュビルの火球によって開始される諸都市の破壊は、「五か月」の期間として表されており、その間、戦争が猛威を振るい、第五の封印において暗黒時代の殉教者たちに与えられた答えの成就として、第二の教皇制による血の惨劇が開始される。

また、第五の封印を解いたとき、私は祭壇の下に、神のことばのため、また自分たちが保っていた証しのために殺された者たちの魂を見た。彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実なる主よ、いつまであなたは地に住む者どもをさばかず、私たちの血の報復をなさないのですか。」すると、彼らひとりひとりに白い衣が与えられ、彼らと同じように殺されることになる、彼らの fellow servants また兄弟たちの数が満ちるまで、なおしばらくの間休んでいるようにと、彼らに告げられた。黙示録 6:9-11

暗黒時代の殉教者たちは、日曜法の危機の期間における現代ローマの殉教者たちを予表する第一の集団である。その危機が到来する前に十四万四千人は封印されるのであり、その封印の過程は、第三の災いとしてのイスラムの到来と、後の雨の振りかけとともに、9/11に始まった。最初の暗黒時代の殉教者たちが、いつ教皇制が裁かれるのかと尋ねたとき、彼らには、暗黒時代が反復される時、すなわち、間もなく到来する日曜法においてニネベの戦いの鍵が成就するときに、第二の殉教者の集団が存在することが告げられた。第二の殉教者の集団が満たされる前に、十四万四千人は封印されるのであり、9/11に始まったその封印の期間は第五の封印の中に示されている。というのも、そこで提示されている対話は黙示録第六章九節から十一節に見いだされるのであり、それによって封印の始まりと終わりが9/11によって画されているからである。その終わりは、黙示録 NINE, ELEVEN に示されているイスラムの滅びを導入し、封印された者たちは、ダニエル NINE, ELEVEN に表されているダニエルの経験を成就しているのである。

これらの事柄については、次の記事で引き続き取り上げる。